

「ともにがんばろう！東北」

関経連速報震災特別号

TEL 06-6441-0105

発行所／公益社団法人 関西経済連合会

編集発行人／三村 典子

FAX 06-6443-5347

2011年9月9日(金) 第3号

編集／苅田 弥生

URL <http://www.kankeiren.or.jp/>

〈不定期発行〉

東日本大震災に関する関経連のさまざまな取り組みをまとめ、関経連速報<「ともにがんばろう！東北」震災特別号>として、乙種を含む、会員の皆様にお送りしております。

がんばろう東北 東北の魅力を知る 「魅知の国まつり」開催！

■ 9月17日(土)～19日(月・祝) 11:00～17:00 (19日は16:00まで)

(主催・東北経済産業局、共催・近畿経済産業局、後援・南海電気鉄道)

なんばパークス横の「なんばカーニバルモール」にて、東北応援イベント「魅知の国まつり」が開催されます。東北各地の観光地や特産品の紹介、物産の販売、そしてB級グルメの試食・販売を通じて、東北の「魅知の味」をPR。有名料理人たちのコラボ・ブースあり、トークショーありと盛りだくさん！また19日まで、南海なんば駅構内では東日本大震災の写真展示も開催中。震災から半年、復興へと前進する東北をミナミから盛り上げましょう！

(企画広報部 TEL 06-6441-0105)

ボランティアバス参加レポート

～ボランティアビギナーズ、気仙沼・大島に行く～

8月19日(金)～22日(月)、3泊(内車中1泊)4日の日程で、NPO 法人大阪ボランティア協会主催の相乗りバス「東日本大震災・被災地支援ボランティアバス」に、関経連から4名が参加、宮城県気仙沼市にて活動しました。そのうち初めてボランティアに参加した女性3名の、それぞれの経験や思いをお届けします。



活動内容

■ 1日目

・ 9時に大阪ボランティア協会前を出発。22時に岩手県一の関へ到着、いつくし園泊。

■ 2日目

・ 早朝、気仙沼港から大島に向けて出発。

・ 港からほど近い個人のお宅兼料理屋で朝9時から活動。学生ボランティアの方々と合流し、総勢40名が5班に分かれてがれき撤去、廃棄物の分別および運搬作業等を行う。

・ 45分作業、15分休憩を繰り返し、15時には作業終了。廃棄物の分別作業が残る。その後、大島、気仙沼を一望できる亀山に登頂し、震災のつめ跡を目の当たりにする。

・ 国民休暇村泊。

■ 3日目

・ 朝4時ごろ、震度3の余震あり。

・ この日は3班に分かれて活動。

<気仙沼(生活支援)班>

・ 早朝、大島から気仙沼・五右衛門ヶ原の仮設住宅地へ。

・ 仮設住宅地内の集会所にて、学生ボランティア、気仙沼ボランティアセンタースタッフの方々と昼食交流会を運営。のべ200名ほどの被災者が参加して下さった。

<大島第1班>

・ 9時から前日と同じ個人宅で10名が活動。全作業を完遂することができた。

<大島第2班>

- ・9時から喫茶店にて、10名でがれき撤去等の作業。店内がほとんど片付いたところでタイムアップ。外回りの撤去作業は他のボランティアチームに引き継ぐ。
- ・夕刻に合流し、気仙沼港の様子をバス内から見学、その後帰途。

■4日目

- ・8時すぎ梅田着。



—実際に現地に行って感じたことは？

- ・行って大きなショックを受けるだろうと思っていたが、実際には淡々と受け入れた自分が、かえって不思議だった。
- ・震災から5カ月が過ぎても、がれき、折れた電柱、地上に乗り上げた船がたくさん残っているのには驚いた。

—ボランティア作業中の感想は？

- ・8月にしては涼しく、よく働けた。老若男女、参加者全員がやる気にあふれ、ベテランの方も多かったので、機動的に動けた。
- ・思わぬところに木のささくれや、釘があり、けがの危険はあると知った。
- ・喫茶店のお母さんからは貴重なお話を伺った。「震災当時は、気仙沼市にいて助かった。もし大島にいればあれもこれも持っていこうと欲が出て、津波にのまれていただろう」とのこと。直接お話を伺う中で、被災者に寄り添うこともボランティアの役割だと思った。
- ・料理屋さんの方は、2年後には早くもお店を再開するという。その力強さ、前向きさには驚いた。



—持ち物について

- ・関経連号に参加してくださった伊藤忠商事さんのボランティア体験レポートがとても参考になった。長そでは必須、特に速乾性のものは便利だった。
- ・粉塵や、廃棄物分別の際の匂い対策に、マスク・ゴーグルは必要。
- ・バスの中ではアイマスクとエアープロー、耳栓が必須。

—ともに活動したみなさんについて

- ・ベテランとビギナーの参加者のバランスがとてもよかった。結束力も生まれた。
- ・大阪ボランティア協会さんのサポートはすばらしかった。行程もよく考えられており、準備がしっかりとできていた。

—全体の感想

- ・被災者や、参加者とお話をする中で、たくさんの笑顔に出会い、エネルギーをもらった。
- ・今度は観光で来ようと、参加者同士で約束できたのが嬉しい。
- ・気仙沼港をバスでまわり、津波の脅威に驚いた。東南海地震への対策は徹底的にしなければならない。
- ・半年前まで学生であった身として、社会人の熱意と底力に感銘を受けた。
- ・今回の経験を踏まえ、今後どのように行動するかが重要。

—これから、私たちがすべきこと

- ・同じ思いを共有する人を増やすためにも、多くの人を被災地に送らなければいけない。震災から時間も経ち、落ちついてきたので、男女問わず、被災地に行くことに対するハードルは下がっていると思う。
- ・各企業でのさまざまな活動を、関経連からしっかりPR、発信したい。

このレポートを読んで、また次の人につながっていけば、と願っています。

(産業部 梅村、国際部 池田、企画広報部 荻田)